スーダンの有用植物＜その９＞

油糧作物

人類にとって油糧作物が不可欠なことは論をまたないが、スーダンにおいても日常の食生活において食用油（調理油）としてフール（ゆでたソラマメ）にかけたり、ドレッシングとして無糖ピーナツバターを野菜サラダにあえたりと油脂は重要な存在である。そのほか、魚、ターミーヤ（ヒヨコマメのコロッケ）、小麦粉の揚げ菓子にも大量の調理油が使用されている。スーダンの代表的な油糧作物としては、ダイズ、ヒマワリ、ラッカセイ、ゴマ、綿実などがあげられ、主にガダーレフ州、センナール州などの天水ベルトにおいて生産されるとともに、各地の搾油工場で種実から油をとりだす工程が行われている。一方、地中海沿岸の中東諸国で食用油として一般的なオリーブはスーダンでは栽培されていない。夏の高温が長くつづくとともに、冬の十分な低温とその持続期間が不足することが栽培上の制限要因とされている。

さて、筆者はカッサラ州（以下、カ州）の洪水灌漑農業地区やリバーナイル州（以下、リ州）の州営灌漑スキームで、農家の収入向上支援のために油糧作物の導入・普及に取り組んできた。

13 年前にカ州で油糧作物の導入を開始した当時は、農家による収穫農産物の販売をまずは目標とし、民間の搾油工場への持ち込みを図るため、ベンダーをとおした契約栽培を画策した。ただし、カ州の洪水灌漑地区における主要な栽培の担い手の「農家」は、じつは牧畜民であった。そのため、牧畜民にとってはヒツジ・ヤギの生産が関心事の第一であり、あまり手のこんだ作物栽培を好まず、比較的粗放管理で成立する綿実、ヒマワリの油糧作物が農家集会で選択された。もともとの彼らの伝統的な栽培経験としては、食用・飼料用のソルガムであったが、その延長線上で換金作物にチャレンジする機会として推奨し、その際に選ばれたのが上記の油糧作物であったわけである。栽培に不慣れな牧畜民への新規作物の導入支援の活動は、おもわぬ苦労の連続であったが、洪水灌漑地区における氾濫河川に依拠した季節灌漑、及び自然施肥で土壌条件には恵まれ満足のいく収穫にこぎつけた。

その後、カ州での経験をベースに、リ州の灌漑スキームの活動でも換金性の高い油糧作物を取り扱うことになった。リ州の高温条件についてはAAINews でもたびたび言及してきたが、一般的に圃場での作業は制約され、現地では作物生産の「死の季節」と言われている。リ州での夏作物は飼料用ソルガム栽培くらいとなっている。ここにヒマワリ、ラッカセイ、ゴマの 3 つの油糧作物のポテンシャルを検討し、夏期の農家収入源として推奨した。ヒマワリは栽培管理上の雑草抑制の容易さから農家の人気が高く、ラッカセイが続いたが、最終的には土壌条件と収益性からゴマが多くの農家に採択された。カ州の活動との違いは、単純な収穫農産物の契約販売にとどめなかった点である。リ州の灌漑スキームの経験から、リ州の農家レベルにあわせて、収穫後の搾油加工までを農家側で実施し、付加価値化によるローカル市場販売を基本戦略とした。それが功を奏し、このような農家運営のリ州内の小規模搾油工場は、加工処理の地域内拠点ないし販売先（マーケット）として機能した。周辺農家の油糧作物の生産意欲は増大し、作付面積は順調に増加してきている。油糧作物は、初めから「有用」であったが、安定した灌漑条件下での栽培技術、ひいては搾油加工技術の相乗効果により、地域農家や消費者にとっての有用性をさらに高めつつあるのが、リ州の油糧作物である。

ゴマの収穫風景

小規模搾油機の設置